

中国女文字紹介

遠藤 織枝

1993年2月、北京大学での日本語教育実習の引率のため3週間ほど北京に滞在した。その機会に、女文字の研究者の清華大学中国語学部 of 趙麗明さんに会見を申し込み、女文字についてあれこれ教わった。それまでに中国に女性だけの文字があることが最近明らかになったとの論文を読んで興味を惹かれてはいたが文字そのものについてのイメージが全く浮かんでこなかった。

趙さんが持ってきてくれた女文字を書いた冊子、紙、扇子を一目見たとき、その文字の線の繊細さと洗練された美しさに感動し、なぜか女文字が一瞬にしてわかったような気さえした。

その後趙さんからきいた話を中心に、趙さんが92年に出版した『中国女書集成』や、謝志民『江永女書之謎』などを参考にして、女文字を紹介する文章を書いた。最初見たときの感動から何とかして日本でも紹介したかった。

しかし書くうちに、聞いた話と刊行物だけではいま一つ核心に迫り切れないもどかしさ、はがゆさが強くなってきた。どうしても現場でこの目で確かめたいと思うようになった。

思いついてから実現するまでには、未開放地区である現地に外国人が入るために許可をとらなくてはならないという意外な伏兵もあり、文字どおり東奔西走させられた。幸い出発前2週間にはOKとなり、今回も現地調査をするという趙さんと桂林で落ち合って8月26日には現地入りすることができた。

県政府の文化担当の主任を初め、県知事、副書記などの歓迎を受け、また趙さんが毎年実施調査に来ている経験から効率よく会う人訪ねる場所などを選んでおいてくれて、4日間の滞在をフルに活かして聞き取りと実地調査をすることができた。

現在完全に女文字が読め、何でも書ける人は陽煥宜さん（1909生まれ）ただ1人。あとは若いころ少し習ったという胡四四さん（1919）と3年前に、

当時最も秀れた書き手であった義年華さん（1919年84歳で没）に習ったという朱雲娣さん（1939生まれ）が、文字の担い手として存在する。その他には、女文字と密接な関係のある当地の古い民謡、結婚式のときの歌など、文字は読めなくても歌の歌える人はかなりいる。女性たちが何かにつけ集い歌った歌を女文字で記録し、また、その文字で歌を伝えるというように、女文字は歌と車の両輪のようにして伝わってきたようだ。

陽煥宜さんの話では、14歳のころから暇のあるときに、義年華さんにお金を払って教えてもらった。毎年2月にお寺へお詣りに行く習慣があったが、そのとき線香を買うと女文字を書いた紙をくれたので、それを見て練習した。書けない人に頼まれて書いてあげたこともある。書くことは楽しかったし、また読めない人もそれを飾って慰めにしていた。

陽さんは、また、10・11歳のころほぼ同年齢の友人と4人で「結交姐妹」^{注1}の関係を結んだ。互いに呼び合うとき、年が同じ人には「老同」、年が違うと「姐々」「妹々」と呼び合い、名前で呼ぶことは少なかった。実の姉が1人いたが、その姉とより、「老同」「姐妹」との方がずっと仲がよかった。

この「姐妹」の1人が結婚すると決まったとき、結婚式の1ヵ月前からその「姐妹」の家で一緒に暮らして、刺繡をしたり、「三朝書」^{注2}を作ったりした。

結婚後は忙しくなって、女文字は書けなかったが、年をとった今は息子の世話になりながら暇があると女文字を書いているという。

この地域 — 江永県の中の上江壩郷一帯 — の女性たちがどのように女文字を習い伝えたかについて、いろいろ聞いてみたところでは、陽さんの少女時代、200戸ほどの村の中で、女文字を書ける人は2、3人しかいなかった。他の村でも多くて10人ぐらいだった。陽さんの姉も書けなかった。

女文字が書けるということは1つのステータスであったようで、義年華さんは女文字が正しく美しく書けるというので他の女性たちから尊敬をうけ、身の上相談なども持ちこまれていたという。

習い方としては、胡四四さんのように「老同」の母親から習ったという人

もいるし、陽さんのようにお金を払って習った人もいる。

陽さんが、この文字で書いたものは、手紙、祈禱文、三朝書、漢詩を翻译したものなどであるが、頼まれて書いたものには吉祥、幸運を祈る文などもあった。

胡四四さんは娘のころ習ったが、あまり使いみちがないので途中で興味を失ったという。それでも6人で「結交姐妹」を結んでいて、それぞれの「姐妹」が結婚するときは三朝書を作って贈った。そこに書いたのは、結婚していく「姐妹」の将来の運命の推測と、別れの辛さ、そして豊かな家の男と結婚する姐妹には自分も嬉しいと喜び、相手が貧しい家の男の場合は一緒にその運命を嘆く、といったものであった。

朱雲娣さんは、解放（1949年）後教育を受けたので漢字を読み書きでき、娘時代も女文字は習わなかった。しかし3年前、亡き母の生涯を伝記に残したくて、自分が語ってそれを義年華さんに女文字で書いてもらった。母の墓前でうたい母を偲びたかったからという。そのことがきっかけで自分も義年華さんから女文字を習うことにした。朱さんにとって女文字は漢字と通じる点があるから覚えるのは難しくないということだが、朱さん自身は現在糖尿病にかかっているほとんど女文字は書いていない。

現在完全に書ける人は陽さんただひとり、胡さんが孫に教えているとか、義年華さんの25歳になる孫が半分ぐらいはわかるとか、若い人に伝えようとの試みもないわけではない。県政府も、母や祖母から少しは習ったことがあるというような人を集めて短期の講習会を考えてもいるようだ。

しかし、そうした形で多少は伝えられるとしても、今後女文字が純粹の文字としての機能を果たすことはあるまい。陽さんが亡くなったらおそらく減じるであろう。

ところで、いったいなぜこの地域だけにこれだけの多くの文字が生まれ伝わったのか。また、その歴史がいつごろまで遡れるのか、これについてはほとんどわかっていない。

解放前、女性たちはほとんど教育の機会を与えられなかった。この地元の

中学校長をしながら女文字の作品を収集していた唐功曙さん（64才）の話では、唐さんの姉は当時の女子高級小学校を卒業しているが、そういう女性は村では他にいなかったという。

このように漢字を教わる機会がなかった女性たちが、漢字の一部をとったり、変形させたり、また刺しゅうの図案と同じような形で文字にしたりして、1,000もの文字を作りだし、この地方の土話の音は全て表わせるという完成した文字体系をもつようになった理由はどこにあるのか。

女文字研究に86年から着手し博士論文もこれで書いたという清華大学の趙麗明さんは、①この地域の女性たちは、他の地域の女性より女性同士が自由に交流できる環境にあった、②結交姐妹の関係が強い、というのが理由の中に含まれるだろうという。

確かに「結交姐妹」の関係の緊密さは、今回訪問した河淵村の村落の住居のありようから納得できるものであった。すなわち、広い農地を控えた山麓に200戸ほどの家が隣と壁を接してびっしりと建てられている。一軒の家から外に出れば1メートルもない道路を隔てて向かいの家の戸口があり、隣の家とは壁1枚隔てているだけの密集した建て方になっている。これはこの地方が昔から盗賊に襲われることが多く、それを防ぐための自衛手段としてよりそって住むようになった結果だという。

このような住宅環境から「結交姐妹」を結び、いつも一緒に遊んだり働いたり、「姐妹」のどれかが結婚する前は1ヵ月も共に寝起きする、などのことが可能になったことが納得できた。

また歴史については、この文字が女同士でやりとりする全く私的なものであったところから印刷物や碑文などに残されることはありえず、そのための時代からとは特定できないと趙さんはいう。ただ、このように多くの文字が作られ伝えられるのは短期間ではできないことで、古くは宋代ぐらいに遡れるのではないかと趙さんは推測している。

学者の中には、女文字は甲骨文字以前からあったと主張する人もいるが、それは学界では否定されていると趙さんはいう。趙さんが1字1字を分析し

た結果、約80%は漢字の変形や漢字の一部が形を変えたものとわかっているから、どうしても楷書成立後にできたとしか考えられない、とのことだ。漢字にルーツがあるとする根拠として趙さんは次のような例をあげている。

𠂔(全)、𠂔(男)、𠂔(甲)、𠂔(坤)、𠂔(但)、𠂔(平)、𠂔(亡)、

𠂔(刀)、𠂔(大)、𠂔(春)、𠂔(天)、𠂔(七)、𠂔(夫)、

漢字にルーツを求められないものとしては女文字伝播地域の周辺にすむ少数民族の刺繡^{註5}の図案から作られたものもあるとして次のような比較をしている学者もいる。

女文字 𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔

刺繡の模様 𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔

もっとも、刺繡の模様から女文字ができたか、女文字から模様ができたかは、まだどちらとも言えないようだ。

1950年代から女文字で書かれたものを収集し整理していた周碩沂さんの話では、50年当時、高齢の女性に尋ねるとほとんどの人が「三朝書」を持っていたという。

しかし、解放後の教育を受けた朱雲娣さんは、自分たちの世代では「三朝書」も持っていないし、「結交姐妹」も結んでいないという。

解放後、女性も漢字を手にするようになり、社会、風俗も大きく変化した中で、女文字を伝える環境が変わり、その必要性もなくなってきた。この文

字の純粋な担い手としては陽さんが最後の人となり、歴史的事実となる日も
そう遠くはなさそうだ。

注1 気の合った女性どうしが、義理の姉妹の関係を結ぶこと。いったん契
りを結んだらその関係は生涯続き、とても緊密なものであった。

注2 結婚した女性のもとに、結婚後3日目の朝実家から届けられる贈り物
のなかに入れて贈られる結交姐妹からの手作りの冊子。

注3 方言よりも狭い範囲で使われる地域語

注4 謝志民氏ら

注5 張相如「江永女書与百越文化的関係」（92年11月全国女書シンポジウ
ム発表）